様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６　月　１５　日現在

機関番号：12611
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009 ～2011
課題番号：21720118
研究課題名（和文）
福永武彦を通した１９３０～４０年代東大の若者の知的ネットワークの調査
研究課題名（英文）
A Reserch on the relationship of young literary men in Tokyo University of the 1930s-1940s, taking the work and life of Takehiko Fukunaga
研究代表者
西岡　亜紀　（NISHIOKA AKI）
お茶の水女子大学・比較日本学教育研究センター・客員研究員
研究者番号： 70456276

研究成果の概要（和文）：
本研究は、小説家であり仏文学の研究者でもあった福永武彦（1918-79）と、その萌芽期の文学仲間の活動を題材として、1930～40 年代東大の若者を中心とする西洋文化受容の知的ネットワークの調査を試みたものである。3 カ年にわたって、長崎、長野、広島における長期の踏査を行い、資料収集や聞き取りを行った。また、調査で収集した情報や資料の集積と分析を進めた。さらにその成果は、国内外の学会・講演会などにおける報告や、学会誌や一般誌における論文に公表した。こうした活動を通して、福永武彦の基礎研究を進捗させたことに加え、近代日本における学問史や文化史の解明にも一つの視点を提供することができた。

研究成果の概要（英文）：
The research project considered the intellectual relation of young literary men in Tokyo University of the 1930s-1940s, taking the work and life of Takehiko Fukunaga (1918-1979) and his literary fellowship as a youth. Several field works in which many research materials were collected , were conducted in Nagano, Nagasaki, and Hiroshima, whose results were made public on journals and presentations in the several academic meetings . The research project at once contributed to fundamental research on the novelist Fukunaga and suggested an effective viewpoint to the cultural history in modern Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：各国文学・文学論
キーワード：比較文学・日本文学・ヨーロッパ文学・文学論・昭和文化・モダニズム・1930～

１．研究開始当初の背景

(1)　申請時における背景

福永武彦（1918-79）は小説家であると同時にフランス文学の研究者でもあり、西洋の文学や文化を自らの創作に意欲的に取り入れようとした人物である。没後 30 年を迎える今日、福永に関する作家研究は進み、『風土』『草の花』『忘却の河』『海市』『死の島』などの長編を中心に作品研究も年々充実してきた。こうした基本的な研究の進展のなかで、この小説家が西洋の文学や文化からどのような影響を受け、それを作品や思想にどのように摂取したのかといった比較文学的な視座からの考察も徐々に試みられている。

西岡は、こうした比較文学的なアプローチに連なるものとして、修士論文以降、福永における 19～20 世紀のフランス文学の受容について探究してきた。博士論文では、福永が研究者としての仕事の中核に据えていた詩人ボードレール Charles Baudelaire（1821－67）の受容に関して、初期から晩年に到る福永作品を追いつつ、ボードレールの「万物照応」Correspondances の文学理論が「純粋記憶」という福永独自のモティーフのなかに発展・定着していく様相をまとめた（拙著『福永武彦論 ―「純粋記憶」の生成とボードレール』として東信堂より刊行）。また、第 69 回・70 回の日本比較文学会全国大会にて福永と 20 世紀フランス文学の比較研究を発表、それぞれの論文が『比較文学』第 50 巻・51 巻に掲載された。

(2)　申請時における動機

上記の探究を経て西岡は、福永の中期や後期のテキストに現れる西洋文化の摂取は、1930～40 年代の作家としての萌芽期における西洋文化との出会いや学問的人脈にその方向性を規程されるものと、強く認識した。特に、1930～40 年代に西洋の書物が積極的に移入された時期に、東大文科というその移入のいわば最前線にいた福永は、当時流行していた 1920 年代フランスを中心とする文学の試み（西村靖敬『1920 年代パリの文学 ―『中心』と『周縁』のダイナミズム―』〔多賀出版、2001 年〕に包括的な言及）に、方法意識を刺激されて出発し、それを戦後に継承したのでは、と考えるようになった。

従来あまり詳しく採り上げられなかった初期の福永の西洋文学との接点を実証的に調査することにより、曽根博義「福永武彦の生成 ―年譜風に」（『遡河』15、1984 年）や源高根『編年体・評伝福永武彦』（桜華書林、1982 年）などの自伝研究を補完し、かつ今後の福永の比較研究を下支えするような資料を準備できると判断した。

また、この時期は福永の就学期に重なるので、福永を鍵として同時代の東大を中心とする若者のつながりも解明される。稲垣眞美『旧制一高の文学』（国書刊行会、2006 年）に続く近代学問と近代文学の成立の関係を探る試みとして、林和仁「モダニズム受容 ―『意識の流れ』技法の試み―」（『比較文学を学ぶ人のために』所収、世界思想社、1995 年）等で論じられる昭和初期のモダニズム受容と戦後文化との結節点を探る試みとして教育史や文化史にも波及するものと考えた。以上が、本研究の動機である。

２．研究の目的

本研究は、福永武彦（1918-79）を軸として、1930～40 年代東大の若者を中心とする西洋文化受容の知的ネットワークを調査するものである。初期の福永の西洋文化受容とその知的背景や人的つながりを一つの事例として、1930～40 年代の旧制第一高等学校、東京帝国大学、軽井沢などの空間における若者の知的なつながりを、具体的な人の動きとともに明らかにする。また、そのことによって、戦後に本格的に出発した世代の文学者や芸術家が、西洋文化についてベースとして持っていた知識や人脈を、実証的に考察することを目指す。

具体的な目的は、以下の通りである。

(1) 学生時代の福永が、どこで何をどのように勉強したのかを、その蔵書、当時の交友関係や学術的環境などの探索を通して明らかにすること。

(2) 福永の初期作品の網羅的な収集と、その作品に現れる西洋文化との接点を分析・考察すること。

(3) 上記を踏まえ、福永を軸にその周辺の若者、いわば戦後になって本格的に出発した文学者や芸術家の草創期のつながりを解明すること。また、そのつながりを、学問史や文化史的な枠組みにも位置づけていくこと。

３．研究の方法

本研究は、2009～2011 年度の 3 年計画で行う。主な方法は、調査活動、調査データの集積と分析、成果報告である。

(1) 調査活動

福永の初期作品の網羅的な調査と収集、就学期の福永の教育環境や交友関係に関する調査と情報収集など、基本的な資料の充実に努める。以下の 3 点を柱とする。

①既に散逸している福永の蔵書のデータを、できる限り網羅的に収集する。学習院大学の仏文学科や図書館の蔵書や、信濃追分の堀辰雄記念館に預けられている蔵書、軽井沢高原文庫が所蔵しているデータなどを中心に、福

永の蔵書のある（あるいはその可能性のある）施設に赴いて、調査とデータ収集を行う。蔵書を実見し、必要に応じて複写・撮影を行う。適宜、他の福永研究者を始め、関係者やその遺族などに助言を求める。
② 福永が在籍していた教育機関の教育環境（蔵書・教育者・カリキュラムなど）や交友関係の調査と資料収集。具体的には、福永の出身校やそれらに関する記録が残る施設に赴き、記録を閲覧、諸機関における西洋文化の移入や紹介の様相を、重点的に探る。また、実地踏査により、長野における交友関係や文学的環境を調べる。
③ 関係者が高齢化しているので、インタビューができる時期に、積極的に知識の供給を受ける。

(2) データの集積と分析
① 蔵書の書き込みの分析や購入時期の確定から、当時の交友関係図の作成や教師や友人といった知的背景の分析を行う。また一方で、収集した初期作品についての分析を行い、そこに見出すことのできる西洋文化との接点を推察、初期の福永の西洋文学との関わりについての全体的な解明に踏み込む。
② 草創期の著作を、『校友会雑誌』『向陵時報』『反求会会報』『映画評論』などの学内誌（東京大学、早稲田大学、日本近代文学館等所蔵）から網羅的に収集する。また、同時掲載記事や福永と交流のあった教師や校友の著作についても、なるべく広くデータを集積する。その際作成した福永の蔵書データベースと福永の初期作品データベースは、必要に応じて CD-ROM の形態に複製し、他の福永研究者に頒布できるよう考慮する。
③ 福永が 1941 年に東京帝国大学に提出した仏語による卒業論文“Le Cosmos du poète ―le cas Lautréamont”（「詩人の世界 ―ロートレアモンの場合」、近藤圭一による翻刻が上記『未刊行著作集 19』に収載）を日本語に翻訳する。内容を解明しつつ、より多くの研究者間で共有できるテキストとする。

(3) 成果報告
①上記の成果の一部を、国内外の学会や研究会で口頭発表する。
② 上記の成果の一部を論文にまとめて、国内外の学会誌や一般誌に寄稿する。
③ 必要に応じて、シンポジウム・講演会・共同討議などに参加する。また、共同研究者とともにそれらを企画し、成果を還元する。

４．研究成果

(1) 研究の主な成果
本研究の最大の成果は、長野、長崎、広島における計 6 回の長期調査と東京大学を中心とした都内の教育機関における探査に基づく資料収集である。調査で得た資料は、適宜集積と分析を進めた。それらに基づいた成果報告として、3 年間で 9 件の口頭発表、5 件の論文執筆、及び書評と翻訳がそれぞれ 1 件、成った。概要は、以下の通りである。
①2009 年度
2009 年 7 月と 2010 年 2 月の二度にわたり、それぞれ 3～4 日、全体の核となる軽井沢・信濃追分に調査に赴いた。堀辰雄文学記念館他の関係機関にて資料閲覧・撮影や学芸員への取材を行い、長野の地縁、今後の取材協力者、福永の蔵書の実情等、自伝研究の射程を定める上での貴重な情報と人脈を、広く得た。また、都内でも『校友会雑誌』『映画評論』等の文献探索、仏語卒論の翻訳(本邦初)、縁の地の探索等を進めた。さらに、2009 年 12 月に、広島で 2 回にわたり、小説『死の島』に関して、栗原貞子記念文庫や広島大学図書館にて調査を行い、新たな知見を得た。
成果報告として、2 件の口頭発表と 1 件の書評執筆を行った。
②2010 年度（計画の一部変更）
昨年度の長野の調査から、福永の蔵書や山荘の遺品などへの学術的立場からの介入には限界があることが分かった。そこで、計画の一部を変更、福永とその学友の学術環境の基盤となった東京大学仏文科の起源と編成の調査を中心に、背景を固めることに変更した。2011 年 2～3 月にかけて約 1 週間、長崎における長期調査を行った。長崎歴史文化博物館、遠藤周作文学館、長崎純心大学等にて資料の閲覧・複写、機関の有識者との面談を行い、今後の調査の基盤を確立した。
また、都内でも『三田文学』に関する情報収集や聴講、関係者との面談、学友の中村真一郎夫人の佐岐えりぬ氏との面談を行い、学友の見取り図の拡充に努めた。なお、本研究の計画変更と前後して、福永の実子の池澤夏樹氏が父親の所蔵品収集に積極的に介入する意思を公表した。その直後の 2011 年 1 月には共同研究者とともに池澤氏との座談会を行った。
成果報告として、1 件の国際学会における英語での報告と 1 件のシンポジウム所感の執筆を行った。

③2011 年度
2011 年 6 月に東京大学総合図書館の図書原簿を閲覧し、適宜文献複写をした。また、2012 年 2 月に 9 日間、昨年度に引き続き長崎調査を行った。遠藤周作文学館・長崎歴史文化博物館・長崎純心大学等にて資料の閲覧・複写、現地の有識者や機関研究者との面談を行い、新たな歴史的事実や資料の狩猟が成った。
最終年度は成果公表に努め、7 件の口頭発表（学会発表、研究会発表、講演含む)、3 件

の論文執筆、1 件の翻訳を行った。翻訳は未発表部分と併せて 2012 年度に出版予定である。また、長崎調査の成果についても論集や地方誌への寄稿の依頼を受けている。

(2) 得られた成果の国内外におけるインパクト

本研究の成果は、大学院における講演、国内外のさまざまな学会における報告によって、なるべく広い分野にわたって公表するように努めた。

① 韓国にて開催された ICLA（国際比較文学会）の国際会議においては、国内外の研究者に福永武彦とモダニズム文学との関係性を提案し、欧米系の聴衆を中心に、日本の表記法への関心の高まりやフォークナーの再評価といった討議が起こった。

② 国際熊野学会での発表では、古典文学、民俗学、思想などに関心を持つ一般を含めた聴衆に、古典文学とモダニズムの融合について提案し、活発な討議を呼んだ。

③ 白百合女子大学大学院における講演や講義録では、若い読者に向けて、太平洋戦争前後に失われた若者の絆が後の文学のなかに取り戻された様相を語り、若い学生が戦争について考えることを促した。

④ 長崎調査において、在地の研究者からの今後の研究協力を求められた。明治期のフランス人宣教師についての知識の提供である。

(3) 今後の展望

本研究では、長崎、長野、広島における長期の調査によって、調査の基盤となる人脈と地脈を得たので、今後は、現地の関係者の調査協力が期待できる。短期調査や通信でのやり取りも用いた、より効率的な調査を行う予定である。また、3 年間の調査で収集したデータの集積と分析作業はまだ完全に終わっていないので、引き続きデータベース化や分析結果の公表に努めたい。さらに、今回の調査を通して、東京大学以外の福永の知的ネットワーク（例えば、近代学問の起源から東京大学仏文への展開といった縦のつながりや原爆文学や他の大学の仏文科といった横のつながりなど）の可能性も見えてきた。

以上の要素を含んだ新たな若手研究(B)「福永武彦を通した 1930～40 年代東大の若者の知的ネットワークの構築」が採択、2012 年度 4 月より遂行している。先の研究に派生しながら新たな研究に接続するものとして、数件の出版と数件の口頭発表（国際学会も含む）が進行中である。ネットワークの「調査」から「構築」に移行する鍵として、単著での『死の島』論の執筆を目指している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

① 西岡亜紀、作品の酵母としての卒業論文――翻訳作業の覚え書に、年報・福永武彦の世界、査読無、第 3 号、2012、75～77

② 西岡亜紀、「喪失」の表象のネットワーク――『死の島』のカタカナ使用とフォークナー・原爆文学、比較日本学教育研究センター研究年報、査読無、第 8 号、2012、237－247

③ 西岡亜紀、「街頭紙芝居」の戦後――『黄金バット』の復活と再ブームを中心に、国文学　解釈と観賞、査読有、76 巻 10 号、2011、135－143

④ 西岡亜紀、（シンポジウム所感）「生」への舵取り　～『草の花』―『死の島』―Hiroshima mon amour ～　、年報・福永武彦の世界、査読無、第 2 号、2011、43－45

⑤ 西岡亜紀、〈聖なる〉響き　―福永文学に共鳴するもの―、『年報・福永武彦の世界』、査読無、2010、4－11

〔学会発表〕（計９件）

① 西岡亜紀、近代文芸のなかの「道成寺」――古典とモダニズムの融合――、単独、国際熊野学会平成 23 年度熊野例会、2012 年 3 月 10 日、太地町公民館

② 西岡亜紀、日本における『人魚姫』の展開、「プロジェクト人魚」第 1 回研究会、2011 年 12 月 17 日、東京理科大学

③ 西岡亜紀、1930～40 年代日本の文化メディア検閲――紙芝居を事例に――、単独（招待有）、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センタープロジェクト「近現代日本におけるフランス文化の影響 ――文学、思想、芸術の領域において――」、招待講演、2011 年 11 月 24 日、お茶の水女子大学

④ 西岡亜紀、ド・ロ神父の宣教活動――民衆版画・絵解き――、単独、国際図像解読研究会第 10 回研究会、2011 年 7 月 28 日、明治大学

⑤ 西岡亜紀、1930～40 年代の日本若手文学者の知的ネットワーク（2）～西洋文学の受容と展開～、招待有、白百合女子大学大学院 2011 年度オムニバス授業「異文化の中の日本文学」、招待講演、2011 年 7 月 11 日、白百合女子大学

⑥ 西岡亜紀、1930～40 年代の日本若手文学者の知的ネットワーク（1）～西洋文学との出会い～、招待有、白百合女子大学大学院 2011 年度オムニバス授業「異文化の中の日本文学」、招待講演、2011 年 7 月 4 日、白百合女子大学

⑦ Aki Nishioka, The Loss of a Symbol －Dialogue in Takehiko Fukunaga’s *Death Island* and Modernism－ 、単独、ICLA（国際比較文学会）第 19 回国際会議、2010 年 8 月 19 日、韓国中央大学校（使用言語・英語）

⑧ 西岡亜紀、〈聖なる〉響き――福永文学に

共鳴するもの――、単独　公開シンポジウム「福永文学の新しい可能性―20 世紀文学を振り返る―」、2009 年 12 月 9 日、世田谷文学館
⑨ 西岡亜紀、作品の酵母としての卒業論文――福永武彦“Le Cosmos du poète - le casLautréamont“について、日本比較文学会東京支部 2009 年度 11 月例会、招待講演、2009 年 11 月 21 日、日本女子大学

〔その他〕
１.書評
西岡亜紀、〈書評〉Makoto Kemmoku, Dominique Chipot, 《Du rouge aux lèvres-Haïjins japonaises-》, La table ronde, 2008.　『Cahier』(日本フランス語フランス文学会)、依頼、2009、29－31
２.翻訳
西岡亜紀／岩津航訳・解題、詩人の「世界」ロオトレアモンの場合（福永武彦著)、年報・福永武彦の世界、第 3 号、2012、57～74《福永武彦が昭和 15 年 12 月に東京帝国大学文学部仏蘭西文学科に提出したフランス語のよる卒業論文“Le Cosmos du poète ― le cas Lautréamont”の第 1 部の邦訳》

６．研究組織
(1)研究代表者
西岡　亜紀（NISHIOKA AKI）
お茶の水女子大学・比較日本学教育研究センター・客員研究員
研究者番号：70456276

(2)研究分担者
無し

(3)連携研究者
無し